

感謝表現としての「ありがとう」と「すみません」の境界線

—シンボリック相互作用理論を適用して—

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、感謝表現として「ありがとうございます」及び「すみません」¹⁾を使用する場合に、どのような語用論的背景が軸となってどちらかを選ぶのか、またどちらも選択が可能なのか、という点について考察する。両者の選択の基準となるものとして、Symbolic Interactionists' Theory (シンボリック相互作用理論。以下SIと略す：Mead [1934]が創始者、Bulmer [1969]が現在の理論へと展開)という社会心理学分野で普及している役割理論を適用し、「ありがとう」と「すみません」の使用選択の境界線を探知する。

この二つの定式表現の選択の要因について、これまで様々な分析がなされてきたが、それらをまとめると大まかに3種類になる。

- (1) 話者が感じる負担の度合いが要因となって選択される (Coulmas, 1981; Greenberg, 1980; Kotani, 2010; 三宅, 1993; 森山, 1992; 西川, 1986; 岡本, 1992; 佐久間, 1983など)
- (2) 社会的関係が要因となって選択される (Long, 2010; Kumatoridani, 1999; 三宅, 1993など)
- (3) 文法構造の影響が選択を決定する (谷口, 2010; 山田, 2004など)

各々の主張は、確かにそれぞれの談話例では適切な指摘をしているが、他の場面に適用できない場合が多く、未だ解決に至っていないと思われる。佐久間(1983)は、両者が同時に使用できる事実を踏まえて、二者択一という分類は難しいとも述べているが、それでは、その選択の前提条件となる共通の社会心理的要素はないのであろうか。あるいは、ある程度の例外は認めながらも、最大公約数的に包括できる基準というものはないのであろうか。本稿では、SI理論を適用してこの基準を探索する。

1) 本稿では先行研究に倣って「ありがとう」と「すみません」を対照して使用するが、厳密には「すみません」の対となる表現は「ありがとうございます」であり、「ありがとう」に対する表現は「すまん」あるいは「ごめんね」であろう。

II 先行研究

まず上記の(1)話者が感じる負担の度合いが要因となって選択される、という点について考察する。「ありがとう」は相手から物理的、心理的な利益を授受したときに使われるが、このような場合「すみません」は使えない。例えば、贈り物をもらった時や、祝いの言葉、褒め言葉を受け取ったときの反応は「ありがとう」が普通である。それを佐久間(1983)は、喜びの気持ちを表明しているからだと言う。Kumatoridani(1999)は、「ありがとう」を喜びをもたらしてくれたことへの感謝と捉えているが、話者側の心理としては同じことを言及している。一方、Kumatoridaniは、謝罪とは相手に不快を与えたからというのが基本であるとし、「すみません」は相手への負担は大きいであろうと判断した上で使われると主張している。この負担はCoulmas(1981)のいう *indebtedness* にあたる。

Kumatoridani(1999)は、さらに職業的役割として遂行する人に対しては「ありがとう」を使うが、この場合それに対して心理的負担は負わないので「すみません」は使わないと述べている。例えば、バスを降りるときに運転手に対して、あるいは料理を運んできたウェイトレスに対して「ありがとう」と言うが「すみません」は言わない。

森山(1992:276)は、日本語の特徴として「相手に負担をかけてはいけない」という規制が働くために「すみません」が感謝の言葉として使われると説明している。これは、岡本(1992:35)の「相手の事前の行動のコストの大きさが関連している」と述べているのとほぼ同じであろう。

まとめると、「ありがとう」は「喜びをもたらしてくれるもの」がカギとなり、「すみません」は「相手への負担考慮」がカギとなって選択をするということになる。しかし、このような区別は多くの例外を生む。例えば、災難にあって命を助けてもらった場合は、「ありがとう」と言うが、これは助けてくれた相手が担った負担は多大なものであり、助けてもらった本人が感じる負担の度合いもかなり大きいものであるにも関わらず、「すみません」という表現は使用しにくい。すると、この場合の「ありがとう」は負担が大きいと言わねばならない。Coulmas(1981)は、*indebtedness* は謝罪(apology)ばかりでなく感謝の *thanking* にも存すると主張しているが、日本語の「ありがとう」にも、この人命救助の例のように、その行為の内容や種類によっては負担や恩義、借りという心理が働くと言わねばならない。

また、親切にしてくれた見知らぬ人に「すみません」を使うのを、負担を表していると判断することは適切かどうかという疑問も生まれる。つまり、親切を受けるとは期待していなかった場合、喜びのほうが多いのではないだろうかという疑問が残る。例えば、映画『あなたへ』で、主人公が水をくむために水道のある場所へ行った時、見知らぬ人が「私のほうが量が多いからお先にどうぞ」と親切に番を譲ってくれたのに対して、主人公が「すみません」と感謝の気持ちを表している。これを負担と感じるのか、意外な親切に対する

喜びと感じるのか、どのように分析すれば良いだろうか。同じ映画で、車の中で寝泊まりする主人公に近所の食堂の人がご飯を好意で届けてくれた時にも、主人公は「すみません」とお礼を述べている。これは負担であろうか。温かいご飯を嵐の中でもらうことは喜びのほうが大きいと思われるが、これも個人的に負担度が異なると判断すべきなのであろうか。この場面では「ありがとう」よりも「すみません」のほうが自然だと思われるが、負担度を基準にすると両者の使い分けの境界線が不明になってしまうのである。Long(2010)の調査では、負担の度合いと「すみません」が出現する頻度数とは必ずしも比例しないという結果が出ている。つまり、負担度が「すみません」を選択する基準にはなりにくい判断せねばならない。

次に(2)の社会的関係が要因、という点について考察する。三宅(1993)は設定場面で使用する感謝の言葉を調査し、感謝心理を持っているにも関わらず「詫び表現」(すみません)を使用するのは、相手の地位や年齢が高い場合が多いと論じている。しかし、様々な場面を考えると、「すみません」が目上に使えない場合もある。例えば、ゼミ生が教授の部屋を訪れて、論文について質問したとする。そして教授がそれに対して適切なアドバイスをしたとする。その場合、「すみません」よりも「ありがとうございます」のほうが自然だと思われる。しかし、話が長くなって教授がコーヒーを入れてくれたとしよう。その場合は「すみません」と学生が言う確率が高いと思われる。これは、目上であっても、その目上の役割(教授として指導する)を遂行している場合、目下は「ありがとうございます」と言うのであり、その役割範囲外の行為(コーヒーを入れてくれる)に対しては、「すみません」が発話されやすいと判断するほうが適切ではないだろうか。

Kumatoridani(1999)は、「職業的役割」の遂行(バスの運転手、ウエイターの料理給仕)に対しては「ありがとう」が頻出するという主張したが、Long(2010)も同じ方向でrole-relationという用語を使って「ありがとう」と「すみません」の境界線を見出そうとした。これは社会的関係が両者の表現の使い分けの基準となるという意味である。Longはアンケートを基に、負担度の多少に関わらず「すみません」も「ありがとう」も現れる事象を指摘している。例えば、「コーヒーを入れる」という行為は、友達やウエイターなど期待度が高い役割関係にある場合、「すみません」の使用度は低く、その役割関係の外にある場合高くなると結論した。

Kumatoridani(1999)とLong(2010)は、「役割」を社会的関係に限定しているが、確かに社会的関係における役割がはっきりと社会規範として認知できるような行為(例:教授が論文指導する、店員が接客する)に対しては、「ありがとう」が使われ、その役割が期待されていない時には「すみません」と感謝の辞を述べる。しかしながら、これだけでは「ありがとう」と「すみません」の選択基準として不十分である。例えば、ウエイターの仕事は、注文を聞いたり、料理を運んできたりするのが役割であるが、客がフォークを落した場合、新しいフォークを持ってくるのも仕事の一部であり、役割を果たしていると

言える。しかし、この場合たいてい客は「すみません」と言う。すると、職業的役割というおおまかな基準では、同じ役割関係が認められていても、微妙に変化する事柄に応じて「すみません」と「ありがとう」が混在するという実際の現象を説明できないのである。だから、この「役割」をもっとインタラクションの中で生起する話者のその場その場のスタンス (Goffman (1981) の footing に近い) や、話者が心理的に把握している identity 領域にまで細かく観察する必要がある (詳細は次の節で述べる)。

また、Long (2010) が例として挙げているコーヒーを入れる行為は、親しい友達同士では、「役割期待度」が高いから「すみません」は表れにくいとしているが、コーヒーを入れることがはたして友達への役割期待度と関係があるのかという疑問もわく。コーヒーを入れてくれた、というのは、相手が「私」に対してどのようにふるまいたいのか (identity)、そしてそれをどのように表現したいのか (role) という心理的領域 (role-identity の範囲: 次節参照) から発している (自発的) 行為であって、それを授受する側には何の働きかけも見受けられない。前述の「贈り物、褒め言葉」と同じ類の好意である。だから、友達への役割期待度とは関連がないといえよう。

次に (3) の文法構造の影響が選択を決定する、という面について考察する。谷口 (2010) によれば、例えば、「～てくれて」の後に続く感謝の言葉は「ありがとう」も「すみません」もどちらも使用が可能であり、「～てもらって」という依頼や「～させて」という使役の後には「すみません」が続くと言う。つまり、依頼や使役表現は詫び表現と共起し、授受表現は詫びも感謝もどちらも使えるが、その授受表現の背景として、依頼した結果の行為には「すみません」が現れ、相手が自発的に行った行為には「ありがとう」が現れる、と結んでいる。これは、(1) の負担の度合いとある程度相関関係が見られ、相手に負担をかける依頼表現の場合には「すみません」が生起しやすく、相手が自発的に行った行為には負担よりも喜びを感じるため「ありがとう」が使われやすいと言えるであろう。

しかしながら、たとえ行為の背景として依頼、自発、強制という前提があっても、インタラクションにおける参加者の社会的関係や行為の内容及び行為遂行の期待度によっては「ありがとう」が優先的に現れることもあり、「すみません」のほうが適切であるという場合も多いのである。例えば、「先生、今日はいろいろ教えていただいてありがとうございました」と学生が教授に感謝の言葉を述べる時、学生が質問に行ってアドバイスを「依頼」したにも関わらず、また「～てもらおう」を使用しているにも関わらず「ありがとう」系が使われる。これは、教授と学生という社会的関係が影響している。質問という依頼をしたのは学生であるが、その依頼の内容が相手である教授の役割範囲内に入っているので「ありがとう」を使うのである。

また、その教授が、学生が退室する時に、「おかあさんの具合はいかがですか。もう大丈夫ですか」と聞いたとする。学生は「あ、もうすっかり良くなりました。いろいろ気を留めてくださってすみません」と言うのは自然な応答である。この教授の気遣いという行

為は、教授の自発的な行為であるにも関わらず、教授の社会的役割の範囲から外れた行為であるから、「すみません」が使用できるのであって、文法的要素とは関係なく「すみません」が現れることを示す。

叔母が甥に教会のバザー用の荷物の搬入を手伝ってもらったとする。すべてが済んで、「まあ、ほんとに手伝わせちゃったわね、ありがとう。おかげで早く済んだわ」とお小遣いを上げながら甥にねぎらいの言葉をかけることは自然である。これは、手伝いの依頼を甥が引き受けたということは、叔母の「期待」が行為遂行の前に背景としてあるからである。たとえその場限りの行為であってもその行為が完了するまでは、「役割期待」が存在するのである。上記の教授の指導は社会的な役割期待であるが、この叔母の依頼は両者のインタラクションで生じた心理的な役割期待である。これが背景にある場合、感謝の言葉は「ありがとう」が普通である。だから、インタラクションにおける自己と他者との関係、行為の内容、背景などが「ありがとう」と「すみません」の選択に第一義的に関係しているのであって、文法要素が必ずしも選択の基準になるとは言えないのである。

以上のように、先行研究では「負担の度合い」「職業的役割」「文法構造の影響」といった要因を基準に「ありがとう」と「すみません」の選択について論じられてきたが、ある一定の範囲内で適用されても、他の場面では当てはまらない例が多く、両者の選択基準は未だ定まっていないのが現状である。

次節では、本稿で適用する Symbolic Interactionists' (SI) Theory について述べる。SI 理論全体の概要については今まで述べてきたので（尾鼻, 2011; Obana, 2012）、ここでは本稿に関係する項目に限定して説明する。

Ⅲ シンボリック相互作用理論 (SI) における role-identity

SI 理論における role-identity とは、インタラクションにおいて参加者 (interactants) がその場面に相応しいと判断した各人の取る立場を示す。Identity という用語は、社会科学の様々な分野で使用されているが、SI においては、identity は、“a situatedness of the person in terms of standing in the context of a particular social relationship or group” (Gecas and Burke, 1995: 45) と定義されている。そして、identity は相互作用として生起するものであって、参加者が本来所有しているものではないと主張する。又、role という用語も identity と区別されており、identity が抽象的なシンボルとして個々の心中で生起するのに対して、role はその identity をどのように他者に対して言動に表すかという遂行、実行あるいは演技（これらを一括して performances という）を示す。例えば、「教師」という identity は社会的にも共通のイメージがあるが、それは我々が社会で育っていくうちに経験を重ねて得た知識を共有しているからである。しかし、現実には、この「教師」という identity は、学校、生徒、教室、教壇という場面設定があり、そこで「教える」に至っ

ではじめて生起するのである。そして、教師の roles は、学校、地域、文化によって具体的な職務内容は多少異なるとはいえ、個人が「教師」として働く場所で具体的な行動として現れる。この行動は、実際の仕事も含むが、言語表現や非言語行動（服装、ジェスチャー）なども含む。Role と identity は、多くの場面で同時に生起するので、role-identity と連結した用語を使うことが多いが、この両者がいつも同質であるとは限らない。例えば、「教師」という identity を同じ学校の教師たちが共通に把握していても、実際の行動面で生徒を厳しく叱るのが教師の role と思っている人もいれば、生徒と一緒に遊んで同じ目線に立つのが role だと思っている人もいる。つまり、role performance が個々によって異なるということもあり得るのである。

Obana (2012) では、SI の role をさらに拡張して、心理的な role もインタラクションで生起すると主張した²⁾。人は職業的役割が基調にあっても相互作用の中で「母親」のような役割をすることもあるし、またそれが言動に表れることもある。また、見知らぬ人と話しているうちに親近感を覚えた瞬間、それまで敬語を基調として使用していても普通体でその場で切り換えるということもあり、逆に普通体で話しているときに皮肉や心理的距離を示すために丁寧体に切り替えることもある（いわゆる speech-level shifts のことである。例：Cook, 1996a,b, 1997, 2008; Geyer, 2008; Ikuta, 1983; Megumi, 2002; Okamoto, 1999, 2009)。つまり、インタラクションで起こる言語現象は、個々の参加者の心理的变化に伴って変化するのであるが、それを Obana (2012) は interactional roles と名づけた。次節では、この interactional roles を利用して、感謝の意を表す「ありがとう」と「すみません」の選択基準を探索する。

IV Role-identity 範囲と「ありがとう」「すみません」の使用基準

Role という用語は日本語では「役割」と訳されているが、SI における role は「職務、責任、義務」という「役割」だけに言及しているのではない。インタラクションにおいてある identity を認知し、それが行動として現れたものが roles であるとする。つまり、roles とは identity を表現するものだから、その中にはいわゆる職務的役割も含まれるが、それ以外に言葉の選択、ふるまい、ジェスチャー、服装、アプローチの仕方など様々な行動の種類を roles と名づけることができる。ゆえに、roles とは、各人がその場面でどのような identity を捉えたのかを具現し、表現する様々な行動の領域のことである。

「ありがとう」と「すみません」も言語行動のひとつであり、この両者の選択には、上記の roles の領域が関連している、というのが本稿の主張である。

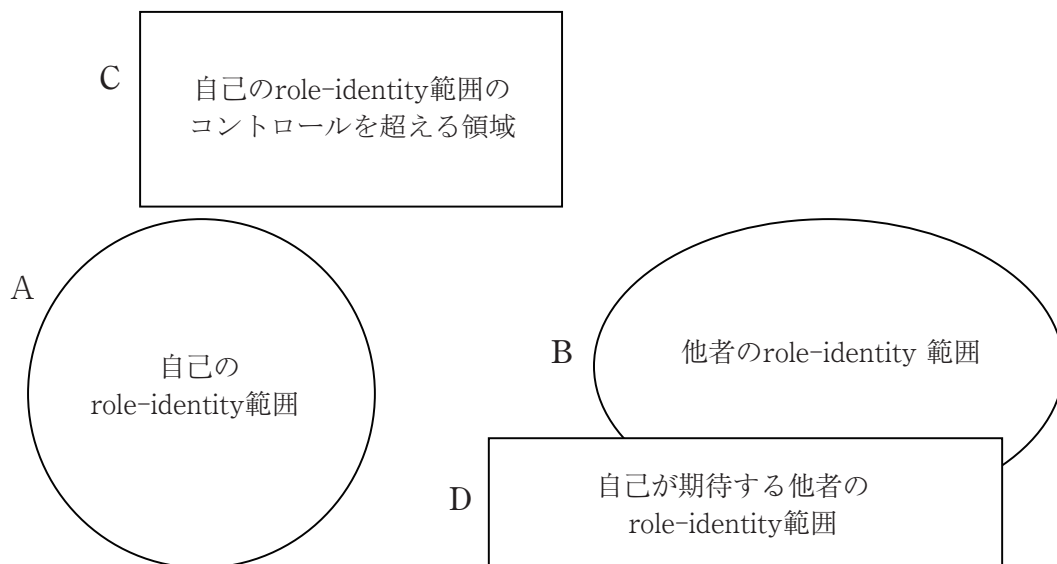
下記の図1は、インタラクションにおいて起こり得る自己と他者の role-identity の

2) その他に task-based roles というのがある。これは、会議の議長役、グループ行動中に一時的に引き受けた会計役など、依頼や状況判断で生じた、ある一定の時間、期間中に遂行する役割のことである。

領域を示したものである。それには、(A) 自己の role-identity の範囲、(B) 他者の role-identity 範囲、(C) 自己の role-identity を超える領域、及び (D) 自己が他者に期待する role-identity の範囲が挙げられているが、この四つの範囲が「ありがとう」と「すみません」の選択基準を提供するのである。ただし、この role-identity の範囲は、roles のリストとか、固定された規範とかいう不変の行動様式のことではなく、総合的な観点、展望のことであり、それを拠点に現実のインタラクションにおいて場面ごとに最もふさわしい言動を決定して表現するのである。

(A) における「自己の role-identity の範囲」とは、自分が社会の一員としての行動や、様々な場面で自分が担うべきだと認識している roles の領域を言う。例えば、ある会社の「部長」がこうあるべきという自己の認識する identity を持っているとしよう。この identity には実際の仕事や責任も含まれているが、部下の模範であるべきとか、常に部下の面倒を見るべきとか、懇親会では自分が部下よりも多くの参加費を出資するべきとか、そういう心理的に自己が担う行動やイメージを追及する行動なども含む。そして、自己が認識している「部長」としての identity を具現化した様々な role performances がインタラクションの中で生起するのである。

図 1



しかし、この自己が認識している identity に反することが起こったとしよう。例えば、ドラマ『ホテルノヒカリ』（日本テレビ）において、部長がその妻に家を追い出され、部下の住んでいる家に泊めてもらうことになるシーンがある。

ホテル：じゃあとりあえずこの部屋に泊まっていいから

部 長：いいの？

ホテル：一週間だけですよ

部 長：悪いな

[資料：王（2014：32）の例を引用]

ここでは、「悪いな」という表現になっているが、「すまん」と置き換えても変わらないであろう。なぜこの「すみません」系が現れるのかということ、部下の家に泊めてもらうという事象は部長の認識している「部長」という identity に反するものだからである。もちろんその結果、部下に対して負担を感じるようになるのであるが、その気持ちに至る背景には、部長という identity を具現化した role performances の範囲を管理できなかったという心理があるからである。

王³⁾（2014：33）は、さらに会議の準備を手伝ってくれた同僚にホテルが「すみませんでした」と感謝を表している例を提示している。これはホテルが会議の準備をする役目を与えられて、それを最後まで仕上げるのが自分の role である（task-based role という：Obana [2012]）と、一時的にしるそう identity を持っているのであるが、なんらかの理由で同僚が手伝ってくれたという事実は、自分の identity-role の範囲をコントロールできなかったという心理に繋がり、それが相手に「すまない」という気持ちに発展するのである。

また、日常会話コーパス [名古屋大学コーパス] の中で、祖母と孫娘が部屋に台を置く話をしているシーンがある。

F025：孫娘30歳、F020：祖母90歳

F025：うん、あとひとつあればいい。ね。

F020：うん？台、ここにもあったんじゃないかな。ちょっと待って。

<台を持ってくる>

F025：うんうん、ごめん。

このシーンで現れる「ごめん」は、孫娘が台を運ぶのは若い自分がすべき role の範囲にあると思っているのだが、それを90歳の祖母が代行したという事実によって、自分が認識する identity の行動としての範囲をコントロールできなかったという心理が生起され、その心理が「ごめん」という謝罪型文として表現されたと判断する。

知らないうちにハンカチを落してしまい、道行く他人が拾ってくれた場合に「すみませ

3) 王はこれらの「すみません」系言葉を、負担を感じる際の感謝言葉と判断している。

ん」が発話されやすいのも、ハンカチなどは落とさず自分のことは自分で管理する（できる）範囲の行為をはからずもコントロールできなかったという心理が背景にあるからである。Ⅱで例として挙げた映画『あなたへ』における「すみません」も同じように分析できる。主人公が水を汲むシーン、食事をしているシーンで他者から受けた好意は、主人公が認識している roles の範疇の行動に他者が介入して成り立った性質のものだからである。まとめると、

仮説1：自己が認識する identity-roles の範囲内の行動に他者が介入した、あるいはその行動を代行した時には「すみません」が使用される傾向にある。

ところが、自己が管理できる範囲を超えてしまうことも起こり得る。例えば、災難から救助された場合（例：おぼれそうになった時に近くで泳いでいた人に助けられた場合）などがある。これが図1の(C)「自己の role-identity 範囲のコントロールを超える領域」にあたる。列車の中で老人が重い荷物を棚にあげられなかった時に若い人が上げてくれた場合も(C)の範囲に入る。この場合は「ありがとう」が使われる。しかし、その老人が荷物は自分で上げるものだという心理のほうが強い場合、「すみません」が使われるであろう。この場合、荷物を棚に上げる行為は、その老人の認識している role-identities の範囲(A)にカテゴリー化されていると言える。

仮説2：自己の role-identity の範囲の管理を超えている（と思っている）行為を他者が遂行した場合、「ありがとう」が現れやすい。

次に図1の(B)「他者の role-identity 範囲」について述べる。他者の roles 範囲とは、他者が認識し、制御している領域を示す。祝いの言葉やお世辞、褒め言葉というのは、他者がコントロールしている領域の行為である。前節で述べたようにSIにおける roles とは「自分がどのように社会（他者）に向かって、自分の identity を言動に表すか」という自己表現を示すので、「褒める」という役割を他者が担っているわけではなく、インタラクションにおいて他者が「褒める」に値すると判断する心理的な identity が生起し、それを「褒め」言葉で表現 (role) するのである。この場合の identity とは自分がこのように演じようというイメージ、即ち話者がその場で取る stance（構え、立場、態度）のことで、これは Goffman (1981) の footing⁴⁾ と同様である。図1の「自己」から見れば、(B)は他者の領域 identity-roles である。そして (B) の範囲から表出する行為に対しては「ありがとう」と感謝の意を示す傾向にある。

4) Footing とは、インタラクションにおいて話者が発話に対して自分の取る立場や態度を定めることで、それが全体のイベントや回りの参加者にも影響するという。

しかし (B) には制約条件が付く。(D) という「自己が他者に期待する role-identity」が制約条件となって機能する。まず、(D) について説明しよう。この (D) の領域には、Kumatoridani (1999) や Long (2010) が提唱した「職業的役割」も含むが、その他に自己の主観的な期待によって構築された role-identity もあり得る。例えば、教授の学生への指導、店員の接客、郵便配達人の仕事などは職業的役割である。主観的な期待には、他者に依頼した事柄が前提にあった場合に発生する role-identity がある。前述の叔母が甥に依頼した荷物の搬入の遂行がその例である。その他、家庭内での家事の分担など（例：ゴミ出しは夫の役目、食器洗いは息子の役割など）、個々のインターアクションで取り決めた役割も主観的な期待といえる。そして、社会的であれ、主観的であれ、「自己が他者に期待する role-identity」を他者が遂行した場合には「ありがとう」が使用される傾向にある。

一方、教授が学生にコーヒーを入れてくれた場合、(D) の役割期待と関係ないからといってこれを (B) の「他者の role-identity」の範疇に入れることはできない。両者のインターアクションは、教授と学生という社会的関係を基調に行われているので、(D) という「自己が他者に期待する role-identity」が心理的にすでに確立しているからである。教授がコーヒーを入れるという行為は普通この (D) の範疇に含まれていない。だから、この行為に対して「すみません」がよく使われるのである。一方、友達同士のインターアクションで、友達がコーヒーを入れてくれるという行為は (B) の「他者の role-identity」の範疇に入る。友達同士には (D) という制約が存在しないからである。だから「ありがとう」を使うのである。

ドラマ『ハンチョウ』で、刑事がある家庭を訪れて事情聴取をするシーンがある。その家庭の主婦がお茶を出した時、刑事が「すみません」と礼を言うのだが、警察の仕事を遂行している刑事の心中には、その主婦がお茶を提供するという行為は (D) の「自己が他者に期待する role-identity」の範疇に入っていないから、「すみません」を使うのである。しかし、同じ刑事が署に戻ったときに同じ課の刑事がお茶を入れてくれた時「ありがとう」が使われているのは、これは (D) という制約がないインターアクションなので、(B) の「他者の role-identity 範囲」から表出した行為であると判断できるからである。

ウエーターの仕事はホールで客への対応全体を示すことが多く、前述にあったように客がフォークを落した時新しいフォークを持ってこることも職務に入っているであろう。しかし、客の立場から見れば、フォークを落さずに食事をするということが (A) の「自己の role-identity」の管理下に含まれているのに、それができず他者が介入（ウエーターが代わりにフォークを持ってこる行為）した、という理由で「すみません」を使うことが多いのである。しかし、新しいフォークを持ってこることもウエーターの職務であると客が思っているなら、これは (D) 「自己が他者に期待する role-identity」の範疇になるので、「ありがとう」というかもしれない。(A) と (D) の区別の揺らぎが、両者の表現の選択の揺らぎとなったり、またどちらも使ったりという結果を招くのである。

仮説3：他者の role-identity 範囲に包括されている行為が遂行された場合には「ありがとう」が使われる。ただし、自己が期待する他者の role-identity がすでに確立している場合は「すみません」が使われやすい。

仮説4：自己が期待する他者の role-identity の範囲の行為をしてくれた場合は「ありがとう」が使われる。

以上、本稿では、「ありがとう」と「すみません」の使い分けは、インタラクションにおいてその場面で自己と他者がどの role-identity を表現しているのか、またお互いにどのような role-identity を期待しているのかが基準となっていると議論してきた。つまり、この使い分けは、自己と他者の相互作用によって生じた identity を言語で表現したものであるといえる。そして、インタラクションの参加者が主観的に捉えた roles の領域が関わることもあるので、「ありがとう」と「すみません」の選択が交差することもあり得るが、選択の傾向は上記の4つの仮説によって包括できると結論する。

V おわりに

Turner (2002) によれば、role の認識は一瞬にしてなされ、またそれは直感的でもあるという。ただし、その認識が適切にできるための知識は、人生で学んでいくものであり、脳に貯蔵されていくと述べている。Sandstrom *et al.* (2010: 145) によれば、社会の相互作用 (interaction) で、参加者は、何が起きているのか一瞬にして察知し、その場面がどういう意味を持つのかをお互いに明確にするという (“We arrive at agreements about this definition of the situation”)。そして、その場面において自己はどのような identity を提供するのかを判断し、それに相応しい自己表現 (roles) をするのである。もちろん個人の経験や環境の違いによって、roles も異なるであろうが、社会のインタラクションにおける role performances は共通の要素が多く、またお互いに共有する期待 (shared expectations) も存すると言う。

言語現象も identity を表現するひとつの手段である。本稿では、感謝表現としての「すみません」と「ありがとう」の選択基準を探知するために、SI の role-identity のあり方を利用、拡張し、インタラクションで生起する interactional roles に焦点をあてた。そして、自己と他者との間で認知する role-identities の領域が両者の表現の選択の基準となると論じた。この認知領域は、社会における共有期待 (shared expectations) として多くの場面で機能するが、一方個々が主観的に捉えている領域もあるので、「すみません」と「ありがとう」がどちらも使用できる場合もあり、選択に個人の違いも出るという面も認めなければならない。

参考文献

- Blumer, Herbert (1969) *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. University of California Press, Berkeley.
- Cook, Minegishi Haruko (1996a) Japanese language socialization: indexing the modes of self. *Discourse Processes* 22: 171-197.
- Cook, Minegishi Haruko (1996 b) The use of addressee honorifics in Japanese elementary school classrooms. In N. Akatsuka, S. Iwasaki & S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 5. Stanford: CSLI Publications, pp. 67-81.
- Cook, Minegishi Haruko (1997) The role of the Japanese *masu* form in caregiver-child conversation. *Journal of Pragmatics* 28: 695-718.
- Cook, Minegishi Haruko (2008) Style shifts in Japanese academic consultations. In K. Jones & T. Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 9-38.
- Coulmas, Florian (1981) Poison to your soul – thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas, (ed.), *Conversational Routine*, The Hague: De Gruyter, pp. 69-91.
- Gecas, Viktor and Burke, J. Peter (1995) Self and identity. In K. S. Cook, G. A. Fine & J. S. House (eds.), *Sociological Perspectives on Social Psychology*, Boston: Allyn & Bacon, pp. 41-67.
- Geyer, Naomi (2008) Interpersonal functions of style shift: The use of plain and *masu* forms in faculty meetings. In K. Jones & T. Ono, (eds.), *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 39-70.
- Goffman, Erving (1981) *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Greenberg, S. Martin (1980) A theory of indebtedness. In K. J. Gergen & R. H. Wills (eds.), *Social Exchange*, New York: Plenum, pp. 3-26.
- Ikuta, Shoko (1983) Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science* 5: 37-53.
- Kotani, Mariko (2010) A discourse analytic approach to the study of Japanese apology: the “feel-good” apology as a cultural category. In N. Sugimoto (ed.), *Japanese Apology Across Disciplines*, New York: Nova Science Publishers, Inc., pp. 125-153.
- Kumatoridani, Tetsuo (1999) Alternation and co-occurrence in Japanese thanks. *Journal of Pragmatics*, 31, 623-642.
- Long, Christopher (2010) Apology in Japanese gratitude situations: The negotiation of interlocutor role-relations. *Journal of Pragmatics*, 42, 1060-1075.
- Mead, H. George (1934) *Mind, Self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Megumi, Maeri (2002) The switching between desu/masu form and plain form: from the perspective of turn construction. In N. M. Atatsuka & S. Strass (eds.), *Japanese Korean Linguistics*, Vol. 10, pp. 206-234.
- 三宅和子 (1993) 感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム: Coulmas (1981) の indebtedness 「借り」の概念からの社会言語学的展開」筑波大学留学センター日本語教育論集 8, 19-38.
- 森山卓郎 (1992) 「関係修復のコミュニケーション: 現代日本語のお礼とお詫びの提携表現」藤森ことばの会 (編)、藤森ことば論集。東京: 清文堂出版、pp. 270-292.
- 西川正行 (1986) 「返礼義務感に及ぼす援助意図性、援助効果、及び援助出費の効果」心理学研究 57, 214-219.

- Obana, Yasuko (2012) Politeness as role-identity – Application of Symbolic Interactionism. 関西学院大学言語教育センター「言語と文化」Vol. 15, pp. 1-16.
- 尾鼻靖子 (2011) 「役割理論における日本語のポライトネス」社会言語科学会第27回研究大会論文集, pp. 90-93.
- Okamoto Shigeko (1999) Situated politeness: manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversation. *Pragmatics*, 9: 51-74.
- Okamoto, Shigeko (2009) Politeness and perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17: 119-139.
- 岡本真一郎 (1992) 「感謝表現の使い分けに関与する要因 (2)」愛知学院大学文学部紀要22, 35-44.
- 王琳 (2014) 「日本語の謝罪型文の関する考察」関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科、修士論文.
- 佐久間勝彦 (1983) 「感謝と詫び」講座日本語の表現3—話し言葉の表現. 東京: 筑摩書房, pp. 54-66.
- Sandstrom, L. Kent, Martin, D. Daniel and Fine, Gary Alan (2010) *Symbols, Selves, and Social Reality*. New York/Oxford: Oxford University Press (third edition).
- 谷口龍子 (2010) 「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり」東京外国語大学論集80号, 179-198.
- Turner, H. Jonathan (2002) *Face-to-Face: Toward a Theory of Interpersonal Behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- 山田敏弘 (2004) 日本語のベネファクティブ: 「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法. 東京: 明治書院.

感謝表現としての「ありがとう」と「すみません」の境界線

—シンボリック相互作用理論を適用して—

尾 鼻 靖 子

本稿では、感謝表現として「ありがとう」と「すみません」を使用する際に、どのような語用論的背景が軸となってどちらを選ぶのか、またどちらも可能なのかという点について考察する。従来、この二つの定式表現の選択については、「話者が感じる負担の度合い」、「社会的な関係」及び「文法構造の影響」という面から論議されてきた。確かに各々の主張はそれぞれの談話例では適切な指摘をしているが、他の場面に適用できない例が多く、未だ解決に至っていない。

本稿では、社会心理学で普及しているシンボリック相互作用理論における role-identity という用語を適用し、それをインターアクションにおける心理的なスタンスにまで拡張して上記の定式表現の選択の軸となるものを探知する。この理論は自己の identity はインターアクションの中で生起するとし、そのインターアクションの内容、起こる場面、性質によって、自己の取り得る identity は刻々と変化すると主張する。Identity とは「自己が他者に対してその場面でどのような役割、立場、態度、スタンス」を取るのかという意味で、その identity が role performances として実際の言動に具現して示されるのである。

「ありがとう」と「すみません」の選択は、この role-identity に関係しているというのが本稿の主張である。自己が認識している role-identity の領域及びそれを越えた領域、他者が認識している role-identity および自己が他者に期待する role-identity という4つの領域を設定し、それぞれの行為がどの領域に当てはまるのかという判断に従ってこの定式表現の選択がなされると主張する。また、この領域は社会的な普遍性を持っているとはいえ、個人の主観的な領域もあり得るので、個々による認識領域の差が定式表現の選択の揺れとなったり、両方とも使用し得るという事実にも言及する。